



あの手この手で考えて、あの手この手で問題解決！

あの手この手のマークの間のSは solution(解決)のSです。

第175号 2022年2月10日 大和市民活動センター[拠点やまと] 発行

2月号
2022



ベテルギウス玄関
2月15日の生け花

ウイズコロナ、ポストコロナの時代

市民活動、NPO活動、社会貢献活動はどうあるべきか

先駆の人を訪ねて 第4回



「社会教育」のフィールドでの先人との出会いを原点に
かながわ国際交流財団等での多様な経験を経て
市民活動中間支援の道へ

小山紳一郎（しんいちろう）（SIDラボ代表）さん



「先駆の人を訪ねて」シリーズ、三人目の登場は、小山紳一郎さんです。

小山さんには、大和市協働推進会議委員に就任して頂いて、10年以上になります。船越は、1990年代のはじめに、林間文化会館の会議室で、パソコンをリアルに有線でつなぐ、パソコン通信講座の講師をお願いして、小山さんと出会ったわけですが、それ以来、30年近く何かとご縁があり、今回、インタビューをさせていただく運びとなりました。

チャンスを得るたびに、つかんで躊躇なく転職し、つぎつぎとその経験と知識を重ねて、それを活かして市民活動の中間支援人となった小山さんの来し方行く末をお伝えします。聞き手は、望月則男、船越英一 2021年12月21日

— この「あの手この手」の一連のインタビューの趣旨は、コロナが依然として収束しない中で、市民活動とか、NPO活動とかが制約されていて、ZOOMのようなオンラインに移行する、そういう流れになっているんですけど、それはそれで必然でいいことなんんですけど、本来あるべきものが、やっぱり必要でしょうということをいつも思っていて、頑張ってきた方からエールをもらいたいなということですとお話を伺っています。小山さんにこの様にお話を伺うのは初めてなんですが、まずは、小山さんが「市民活動の中間支援」に入られるまでの「来し方」をお話しいただけますか

横須賀市の社会教育課勤務時代に魅力的な人物に出会って、そこで感化されたっていうのが大きいと思いますね

大学を出て、横須賀市役所に入庁して2年後に教育委員会社会教育課に出向になり、早い時期に山梨大学に社会教育主事講習に行かせて頂きました。その後主事発令を受け、退職時まで6年くらい横須賀市にいたと思います。

当時は、公民館の現場ではなく社会教育課に在籍し、家庭教育学級や成人学校の企画のほか、県の研修会の公民館への周知や公民館長会議の運営などを担当していました。当時、婦人学級というのがあって、山階鳥類研究所の柴田さんという有名な鳥の専門家の案内でフィールドワークをしたり、女性史の会などのまちづくりに近い活動に意欲的に取り組んでいる人など、多くの魅力的な人物に出会い、感化されたのが大きいですね。そういう先輩たちに一步でも近づければいいなあという、あこがれみたいな気持ちを持っていました。

NPOとかコ・ワーキングスペースなどが一切ない時代で、公民館が唯一、学びを通して、人と人がつながって、街を変えいく社会装置っていう機能を持っていたと思います。当時のトップランナーの社会教育主事さんたちは、

いまの言葉でいうとコミュニティオーガナイザーの役割を果たしていたと思います。

また、市民大学の「西洋音楽史」という講座を担当した際には図書館を利用し、また、他のスタッフが担当する市民大学講座の手伝いで、博物館や文化会館に出入りしていたので、そこで司書や学芸員の方々と顔見知りになりました。僕の場合、市民大学等の仕事で始終三館種に出入りしていたので、公民館だけでなく、図書館や博物館も結構身近な存在になりました。

あとは、女性史の会など、趣味サークル系じゃなくてちょっと社会派っぽい団体とのつきあいもありました。当時はNPOとか市民活動とかいう言い方はしてなかったんですけど、団体活動っていう形で、いろんな人に会って、お話を聞くのがとても好きでした。今の分け方だと、公民館の利用団体と市民活動団体やNPOは遠い感じがするんですけど、実はどこか底流でつながっている部分があるのかなと思います。

— 社会教育施設間連携を実践された小山さんですが、この後、どうされたのですか

かながわ国際交流財団に転職しました。財団本部が「あーすぶらざ」（県立地球市民かながわプラザ）に移転後、企画情報課長になり、専門図書室の担当になりました。また、「あーすぶらざ」は博物館的機能を持つていましたが、横須賀市教育委員会社会教育課勤務時代に図書館・博物館に始終出入りしていた経験があったので、全然違和感がなかったし、わりとこう苦労なく、すっと入れたという感じです。

— 國際交流財団では、どのようなお仕事をされたのでしょうか

NGOの支援、地球市民学習に関わる人材の育成、教材の開発、ESD事業などたくさん。でも今考える市民活動団体の中間支援的仕事ですよね

国際交流財団の中では、民際協力基金を通じたNGOの支援、それから地球市民学習に関わる人材の育成、教材の開発、ESD（エデュケーションフォーラム・サステイナブル・デベロップメント）ネットワーク事業などをやっていました。

ESDは、翻訳すると「持続可能な開発のための教育」という意味で、実はSDGsより早くスタートしています。2002年に政府とNGOが南アのヨハネスブルグで開かれたサミットで、持続可能な開発のための教育を国連事業として採択し、推進してほしいという提案をしたんです。当時「あーすぶらざ」が行っていた地球市民学習は、



表紙絵は「やまと国際フレンドクラブ」主催
2021「第14回やまと国際アートフェスタ」
入賞作品を掲載しています。

今回のテーマは～笑顔のために～

バラード賞受賞

中野 アンジェロ ヒロ さん

柳橋小学校（5年）《ジャマイカ・日本》

タイトル：「Be Kind」

メッセージ：大和市にやさしさの気持ちを広げたいと思って、この絵をかきました。みんなが自分のかいだ絵を見て、リラックスできるようにイメージしました。

「やまと国際アートフェスタ」は
「やまと国際フレンドクラブ」（IFC）*の主催で
毎年催されています。

*草の根の国際交流、外国人支援を行いながら
「ともにくらすまち 大和」を考えるボランティアグループです。



令和4年度 大和市市民活動推進補助金の応募申請は終了しました。
公開プレゼンテーション：3月5日（土）

ベテルギウス2階市民活動センター会議室にて開催予定です。
(新型コロナウイルスの感染状況により、変更される場合があります)

「めばえ」：活動をこれから始める、又は始めたばかりの皆さんに対する補助
「はぐくみ」：既に活動をしている皆さんに、より活動を発展させるための補助

申請した団体の活動PRを聞いてみませんか？
活動のヒントが得られるかも知れません。
センターにお問い合わせください。

人権教育、開発教育、異文化理解教育、平和教育、環境教育、メディア教育等のあらゆる教育分野を包含するような包括的な概念でした。まさにESDだったんです。

しかし、その当時、役所の人に、「地球市民学習ってなんだかさっぱりわからない」と言われることが多かったので、ユネスコが推進しているESDという呼称をTPOに応じて使い分けていました。具体的に言うとワークショップ等の開催を通じて、異なる教育領域で活動する人を結び、分野横断的な人のネットワークをつくろうとしていました。

— 小山さんと言えば、多文化共生の専門家とぼくは思っていたのですが、そのあたりのお話を伺えますか。

西暦2000年問題って覚えてますか。その対応のためにやったプロジェクトが多文化共生事始め

1999年の10月くらいに、当時の小渕首相が、もしかしたら電気、水道がコンピュータプログラムの関係で止まるかもしれないから、年末年始にかけて、水、食糧、灯油、懐中電灯を備蓄して、国民に呼びかけたのです。

実際にはたいした問題は起きてなかったのですが、財団内に「西暦2000年問題多言語化プロジェクト」っていうのを立ち上げて、「みずら」、横浜市国際交流協会など17の関係機関・団体に「西暦2000年問題への備えについて外国人住民への周知が進んでいないので、早急に多言語でチラシをつくって、県営団地とか、留学生会館などに配りたいんだけど協力してくれますか。だけど予算は0なんですね」とお願いしたら、皆さん快く協力して下さいました。

それで、10言語のイラスト付きのチラシをつくって、印刷するのと同時に、チラシの原稿をスキャナーで読み込んで、財団のホームページで公開しました。

そうしたら、ある日、京都市国際交流協会からこんなメールが送られてきました。そこには、日本語教室の先生から聞いた、こんなエピソードが書かれていました。日本語教室の日本語教師が、神奈川県国際交流協会のホームページにある多言語のチラシを印刷して外国人の学習者に渡し、「西暦2000年問題があるから気をつけて」という話をしたら、ある学習者から「先生、僕たち西暦2000年問題のこと知ってた。だけど、こんな多言語のチラシまで作って、配ってくれる団体が神奈川県にあるっていうのを知り、うれしく思った」と。このメールを読み、多言語チラシは、情報提供という意味では役に立たなかっただけ、このプロジェクトを通して、京都市にいる学習者と心を通わすことができたと思いました。

「西暦2000年問題多言語化プロジェクト」をきっかけに、多言語医療問診票をネット配信するプロジェクトに関わることになった

これが始まりで、たまたま「西暦2000年問題多言語化プロジェクト」を知った、国際交流ハーティ港南台という国際交流グループから、「医療問診票を多言語化したものをネットで配信できる仕組みと一緒に作ってもらえないか」というオファーをいただきました。予算がなかったので、クレア（自治体国際化協会）から助成金を取り、2006年に東京外国語大学の中に、多言語多文化教育研究センターという新組織が立ち上りました。そのセンターを実質的に動かすコーディネーターとして就任したのが、武蔵野市国際交流協会で先進的な事業を手がけた、

一番多いコンテンツだと思います。今は18言語で11診療科目があります。

実は、このプロジェクトにも予想外のエピソードがあります。サイトを公開した直後に、タイに住んでいる駐在員のご家族のお母さんからお礼のメールが届いたんですよ。日本語とタイ語の対訳の問診票だったから、「子どもの病状を正確に伝えられて、助かりました」という内容でした。

「西暦2000年問題多言語化プロジェクト」は新聞に取り上げられ、財団の認知度が徐々に上がることによって、外国人住民や支援者の方からのアクセス数も増えていきました。その後、自治体や関係団体が発行している多言語生活資料（冊子やマニュアル等）を「あーすぶらざ」に収集・蓄積・提供する「多言語資料センター」を立ち上げるとともに、資料の基本情報をデータベース化し、インターネットで資料のメタデータが検索できる仕組みをつくりました。

今考えると、かながわ国際交流財団時代に取り組んだNGO支援は、市民活動団体の中間支援的な仕事ですね

今から考えると、かながわ国際交流財団時代のNGO支援の仕事は、やっぱり市民活動団体の中間支援の仕事ですし、当時やっていた地球市民学習やESDの事業は、今私が茅ヶ崎市の市民活動サポートセンターで取り組んでいるSDGsカフェの事業につながっています。

 横須賀市教育委員会、かながわ国際交流財団、ちがさき市民活動サポートセンターと、勤務先は変わっても、結局は、社会教育、NGO支援、ESD・SDGs、まちづくりというようなフィールドの中で、ぐるぐる回っているだけなのかもしれません。

— ここまで、お話を伺ってきた中では、小山さんのティフラークのようなことを転職しながら、経験して積み上げていけたことは、ラッキーだったんでしょうね。

2006年に東京外国語大学の特任研究員となり、早稲田大学の山西先生と山西・小山班というチームをつくってコーディネーター研究をしました

そうですね。ラッキーでした。僕は、2006年から東京外国語大の特任研究員となり、2007年には早稲田大学の山西先生と二人で山西・小山班というチームを作って、コーディネーター研究をする機会に恵まれました。論文を読んで理論を作るというよりは、実践者からヒアリングをして、コーディネーターの暗黙知を探るというアプローチの研究で、2年間やりました。僕にとっては、この経験が後の人生の養分になっているのかなあと思います。

多文化社会におけるコーディネーターの役割を実践研究し、その成果をまとめて、全国フォーラムで発表したり、年に1回報告書を出したりしていました。

2006年に東京外国語大学の中に、多言語多文化教育研究センターという新組織が立ち上りました。そのセンターを実質的に動かすコーディネーターとして就任したのが、武蔵野市国際交流協会で先進的な事業を手がけた、

杉澤さんというベテランの方でした。彼女は、実践がわかる研究者と研究的な視点を持った実践者十数人に特任研究員就任を呼びかけ、それら研究員の中から複数の研究班を立ち上げて同時並行で走らせたんです。

多言語・多文化協働実践研究

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターは、多分野の専門家や現場の実践者と共に多言語・多文化社会の課題解決に向けた「協働実践研究」を開催して、2007年度から5つの班に別れて、全国のさまざまな分野や現場の方々と協働で実践研究活動を進めた。2年間にわたるプログラムの中で、2回の全国フォーラムを開催した。

山西・小山班は「多文化社会におけるコーディネーターの専門性と形成の視点」から、実践研究を行った。

現職の仕事を続けながら、東京外大に研究員として行かせていただき、多くの先達との出会いと学びがありました。

— このあと、小山さんが市民活動や、中間支援的な仕事の道に入られたきっかけは何ですか

やっぱり、かながわ国際交流財団への転職が大きいですね。そこでKISコーナーが僕を育てました

やっぱりかながわ国際交流財団への転職が契機になっています。僕が財団に入った時、当時の神奈川県国際交流センターには、Kanagawa Information Station Corner、通称KISコーナーが動き始めました。

実はこれ、全国各地にある市民活動サポートセンターの原型なんです。KISコーナーに行くと、平和とか人権、女性、環境等、さまざまな市民活動団体のチラシが壁一面に貼ってあって、テーブルにも情報誌がいっぱい置いてある。KISコーナーは1998年に開設されたのですが、ここには、ワープロとパソコン、貸しロッカー、貸しレターケース等、現在のNPOセンターが提供している機能はすべて揃っていました。

KISコーナーには、予約なしで利用できるフリースペースがあり、さまざまなNGO活動の人たちが出入りしていました。好きな場所に座ってお茶を飲みながら熱く語り合う、自由な雰囲気がありました。当時は、今で言うNPOサポートセンターがなかったので、異分野で活動するNGOスタッフがここでつながる唯一のスペースでした。これからアジア市民フォーラムなど、さまざまな動きがうまれてゆきました。

KISコーナー(Kanagawa Information Station)

市民グループの活動のためのスペースNGO活動の支援と相互交流の促進を目的に1987年に(財)神奈川県国際交流協会(現(公財)かながわ国際交流財団)事務所に隣接して設置。①情報交換の場、②作業の場、③企画の場として3つの機能をもたせ、NGOや市民グループが発行するニュースレターやイベントのチラシなどを置き、無料の印刷機やイベント準備用の道具を揃え、複数のグループがミーティングを行えるスペースを設けていた。

かながわ民際協力基金というNGOの財政支援をする仕事を通じて随分と鍛えられました

僕自身が鍛えられたのは、かながわ民際協力基金というNGOの財政支援をする仕事を通じてでした。助成金審査は、申請書を出した団体自身がプレゼンをして、外部の審査員が審査をする形態が多いと思うんですけど、かながわ民際協力基金の場合はプレゼンは財団の職員がやるんです。

なので、職員は申請書を何度も読み込むとともに、申

請案件に関する情報をインターネットや本から仕入れた上で、申請団体に代わって、プレゼンをします。その道の専門家の審査員がガーッと居並ぶ中でプレゼンするので、すごく緊張するんですね。

だから、すごくしんどいんですけど、鍛えられましたね。具体的なエピソードを紹介します。

ある時、クリアチーボスという団体から申請がありました。ラテンアメリカ出身の若者への支援活動をする団体で、エイズ予防の啓発活動に関する助成申請でした。代表が日系のブラジル人で、日本語を話すことはできますが、文章を書くのが苦手でした。とても素晴らしい活動をしているのですが、プロジェクトの内容を申請書に上手に表現できていなかったのです。時間をかけて対話をしながら、申請書の内容を少しずつ修正していきました。しかし、最終的に、日本語の文章としてはぎこちない表現を残したまま、申請書を審査員に送ることになりました。審査委員会の当日、僕は、「この書類は日系ブラジル人の人が作ったもので、文章上おかしいところがあるかもしれないけど、活動そのものは素晴らしいので、そこを見て欲しい」と訴えたんです。幸いなことに、このプロジェクトは高く評価され、審査委員会をパスしました。

クリアチーボスの一件は、助成審査に必要なものは、決して申請書の見栄えや華麗なプレゼン能力ではなく、その団体が成し遂げようとするプロジェクトの中身そのものだということを痛感した貴重な経験でした。同時に、申請されたプロジェクトの本質を見極める鑑識眼が問われる、とも思いました。

一今の民際協力基金でのお話で、助成の仕事が小山さんの中間支援の仕事の原点だとよくわかりました。

では、まとめとして、これまでのコロナの状況で、福祉の分野でいうと、たとえば、僕の親が入居していた有料老人ホームでは、以前は、地元の人が来所して、太鼓を叩くとか踊るとか、年末の餅つきとかいう行事が、もう心配でできないという状況時にどうしたらいいかというお話をいただけますか

孤立している人に手を差し伸べる直接支援は地元の地域包括支援センターの役割。中間支援組織の仕事は、包括支援センタースタッフへのサポート

今僕は、茅ヶ崎で年に1回「地域の居場所づくり交流会」を担当しているんですけど、一昨年も昨年も、ZOOMを使ってオンラインで開催しました。一昨年に開催した第4回目の終了時に、年に1回集まるだけでは継続性がないから、ネットワークを作ろうと思って呼びかけたら、10人くらいの方が趣旨に賛同してください、情報交換のネットワークができました。ほんとは対面で交流したいと思ったんですけど、ちょうど立ち上げの時期が新型コロナの流行期と重なっていたので、いまはFacebook上で情報交換を続けています。

あともうひとつは、福祉の分野でいえば、地域包括支援センターを運営している社会福祉法人職員さんが、ZOOMのホストをやったことがなくて、困っていることが見えてきたので、「パソボラ湘南」というIT支援ボランティア団体と連携して、月に2回、サポセンを使って、社会福祉法人とかNPO、市民活動団体等向けのIT講座を

やり始めています。

高齢者など、地域で孤立している人に手を差し伸べる直接支援は、地元の地域包括支援センターの役割。中間支援組織の仕事は、地域包括支援センターやNPOスタッフの能力向上をサポートすることだと考えています。

—ZOOMなどオンラインを利用しての取組みが増えてきている中で、その扱いに長けている、市民活動の現場では比較的若い層にかかるわてもらおうとする動きが出ていると思うのですが

中間支援として、お互いを知る場づくりを考えていきたいけど、成果は急がない方がいい

今、茅ヶ崎市では、コ・ワーキングスペースに集う人が元気なんですね。ITエンジニア、デザイナーといった職業の方々がコ・ワーキングスペースに集まっている印象があります。こういう方が、プロボノとして、自治会のような地縁組織やNPOと出会う場づくりみたいなものも考えていきたいなあとは思います。

こういうことを考えている中間支援組織はたくさんあると思うんですけど、僕はあまり急がない方がいいと思います。というのは、それが生きている世界が違うので、成果を急いでマッチングするのは危うい。あの人はああいう風な文化を持ちながら、世界を生きているんだと思えるようになるまで、時間をかけてお互いを知る。自らの生活世界の境界を緩めたり、時にはボーダーを越境しながら、他者の生活世界との重なりを時間をかけてつくっていくことを大切にしたい。だから、成果を急がず、ゆっくりと構えた方がいいと思います。

一貴重なアドバイスありがとうございます。まとめとして、地域の居場所のお話を伺いたいんですが、前号の(Fの初夢)で紹介された「素敵なかフェ」で、オーナーの畠で取った野菜を使ってプレートランチを提供するとか、料理教室に場を貸すといったカフェの展開はおもしろいと思うのですが。

多分、営利か非営利か、官か民かという分け方ではなく目的に着目することが大切なんじゃないかな

さっきお話を地域の居場所づくり交流会で、2020年にオープンしたブックカフェのオーナーさんに事例報告をお願いしました。そのカフェは、決して金儲けをするためにつくったのではないです。もともとはご実家の土地が茅ヶ崎にあって、ご本人はしばらく北海道で書店の仕事をして茅ヶ崎に帰ってきた。蔵書が1,000冊以上あり、それをもとにカフェを始めて、ビブリオバトルとか、読書会なんかをやりながら、まさに居場所づくりをやっているんです。

また、古い酒屋の店主さんを事例報告者に招いたこともあります。今の時代、お酒をたくさん並べても売れないで、お店にちょっと大きめなテーブルを置いて、そこで地域の人に来てもらい、着物のリメイク品や、地域活動センターの製品を販売したり、あとは地元のおまつりのときには、テーブルを囲んで

小山さんにインタビューさせていただいたのは、相鉄線瀬谷駅南口から徒歩10数分の「喫茶バス通り」(名前の由来はバス停の前にあるから)
EP1 インタビュー中、マスターの奥さまが顔を出して、「小山さん、早く戻ってきて」とひとこと。このカフェのスタッフとして期待?
EP2 船越の飼い猫が1歳で夭折したタイミングでしたが、喫茶外に里親募集の猫の写真がずらり。地域猫活動の拠点でもありました。
EP3 ずっと流れていたBGM。望月がマスターに訪ねると、アンプは真空管を使っているそう。たいそう高価ということで、メカ好き同士たいそう盛り上がり、オーナーは喜んでいました。



「喫茶バス通り」におけるピアノと真空管アンプの音響装置

お茶を飲んでつながる拠点になる。その酒屋さんは、商店街の一角にあるんですが、そこはまさに居場所だし、街づくりセンターですね。

「第3回地域の居場所づくり交流会」を開催した際、自治会関係者の方が参加されていたんです。そしたら、イベント終了後のアンケ

トに「こんな金儲けをしてる团体を呼ぶとは何ごとだ」とのお叱り言葉が書かれていたんです。自治会活動をされている方の中には、「地域活動は一切お金儲けてはいけない」という考え方をお持ちの方もおられます。こうした方は、活動の目的ではなく、「お金が動く=営利」と捉えてしまうようです。

長年事業をしていると、時折こうした苦情を受けることもあります。大切なのは、営利か非営利か、官か民かといった分け方ではなく、目的に着目することではないかと思います。

「持ち寄り社会」実現に向けた場づくりが必要。そのためのコーディネーションを中間支援組織がやっていくのかなあと思います

たとえば、先程お話をした福祉の分野では、複合的な生活課題を抱える家族が増えています。例えば、8050問題のように、認知症のおかあさんと、ひきこもりの中年の男性がいる家族の問題解決は、自治体のどこが所管するのか、高齢福祉課なのか、障がい福祉課なのか、それを検討しているうちにどんどん時間が経ってしまうのです。

結局、問題解決に向けて、自治体の所管を越えて、横ぐしを通す必要があるけれど、自治体の職員数は限られているので、なるべく自分のテリトリーから外へ出たくないし、出たくても出られない事情がある場合もある。

でも、だからって何もやらなかったら物事は動かないのでは、やっぱり官民を問わず、いろんな立場の人たちが知恵を持ち寄って問題解決していく場づくりが必要なのかなと思います。そのコーディネーションを中間支援組織がやっていくことになるのでしょうか。



(編集・文責・写真:船越英一、イラスト:望月則男)



やまもり☆ホッとスクランブル
大和市民活動センターだより

『やまとっこ☆みつけた』



第394回 1/18(火)

「RUN伴プラスやまと」

実行委員 石井 直樹さん



認知症の理解を深める啓発活動「RUN伴」の理念を継承し2016年5月に誕生した大和市オリジナルの「RUN伴プラスやまと」、コロナ禍による昨年の中止を経て、20チームがフラダンスを踊る動画で参加してリレーを繋ぐ21分間のオリジナル動画が昨年11月11日(介護の日)にYouTubeで公開されました。

石井さんは今後も「認知症になっても安心して暮らしていく街 大和」を目指して活動を続けたいと語りました。



FMやまと 77.7MHz 第1.3.5(火) 生放送 9:00 ~ 10:00 同日再放送 15:00 ~ 21:00~

第395回 2/1(火)

「やまと国際オペラ協会」(ZOOMでのご出演)

会長 長谷部 浩士さん 事務局長 長谷部 美由紀さん

やまと国際オペラ協会は2015年4月に設立され、現在110名余りの会員が所属する市民団体です。新型コロナウィルス感染拡大に伴い今年3月上演予定のG.Verdiの歌曲「ドン・カルロ」の開催延期を発表しました。「この苦難をより良いものを創る為のチャレンジと捉えたい」と語る長谷部会長。



大和のオペラ文化発展の為、常に前向きな姿勢で臨んでいます。

① 母を静かにさせるため始めた食生活の情報発信

市民活動センターでは、今まで市民活動団体のインタビュー記事やカッコフェスタの動画配信を通して情報発信してきた。インタビューや動画作成は本当に楽しくさせてもらったが、世の中には他に、望んでいなくてもやらなければいけない情報発信もあると思う。



カッコフェスタの動画配信

僕は一人暮らしでの自炊生活をSNS(LINEのVOOM・旧タイムライン)に投稿し続けている。これを始めたのは、大和の実家に僕が帰る度に「普段の生活について話してほしい」としつこく尋ねる母を静かにさせるためだ。実家では進路のことを執拗に訊かれるし、家事や力仕事、パソコン関係の雑務も手伝わされるため、安心して休めない場合も多い。妥協を探した結果、食生活の情報発信に辿り着いた。

しかし、こうした食生活の情報発信を続けるうちに、料理の上達を実感したり、予想もしていない友人からの反響があったりもした。

スパイスカレー(写真)は、料理で新しいことに挑戦しよう

と思い、業務スーパーには売っていないスパイス(クミン・コリアンダー・ターメリック)を使い作った。このカレーは僕の好みに本当に良く合ったので、食べた時には料理の上達を実感した。友人を家に呼んでカレーを食べてもらつたりもした。

また、一つ授業が彼ただけで疎遠になっていた、同級生の男子と偶然再開した時に、彼から「翼さんの作る料理、いつもうまそうだと思って見てます。」と言われたこともあった。彼は「いいね」はしていないが、投稿を見てくれていた。

④ 今後の情報発信は

料理の投稿は昨年10月から今年1月末までの期間、およそ3日に1度投稿し続け、35回続いている。母を静かにさせるため始めた情報発信であったが、料理の上達を実感したり、友人から反響を得られたりする契機となつた。今後は「いつも食器皿が同じだね」と文句をつけた友人を静かにさせたいと思っている。(サポーター 尾畠 翼)

② 見栄えがしなくても投稿する料理

普段作る料理は、近所の業務スーパーで安く手に入る鶏胸肉や玉ねぎ、にんじんを使った料理が多い。例えば、11月の夕食には味噌野菜炒めを作った(記事用に見栄えの良い食事を選出している)。注目していただきたいのは、味噌汁に油揚げを多く入れていることだ。写真としては見栄えがしないが、好きな油揚げを食事に取り入れ一人暮らしを楽しんでいる、という日常生活を伝えることこそ、実家に帰りやすくする手段であるからだ。



味噌野菜炒め

大和市民活動センターは「大和市新しい公共を創造する市民活動推進条例」に基づいて設置されています。

「あの手 この手」 第175号 発行日: 2022年2月10日

大和市民活動センター <開館日 月～土 9:00～18:00>
<休館日 12月29日～1月3日・毎月第3月曜日>
〒242-0018 大和市深見西1-2-17

発行:大和市民活動センター 拠点やまと

TEL:046-260-2586 FAX:046-205-5788
e-mail:yamato@ar.wakwak.com
http://www.kyodounokyonen.com/